

行政書士のための後見・終活実務

平成30年4月
優オフィスグループ 代表
行政書士 東 優

● 終活支援業務とは

<終活とは>

人が年を重ねて否応なく立ちはだかる「老い」「病」「死」に対して、自分なりの考えをとまとめ然るべき対策を講じて、「キーパーソン」に伝えて、いざというときに自分の考えや対策を実現させるための諸々の活動のことを指す。「終活」を通して、自分自身の課題を発見し、その課題に対して自分なりの考えをまとめて、然るべき対策を講じていくことが、少子高齢社会において必要不可欠となっている。

終活のイメージは、別紙のように表すことができるが、終活の課題のうち、行政書士の立場からは、「認知症対策」と「相続」の課題について、専門家としての支援を行うとともに、介護、医療、葬儀、お墓の諸問題についても、顧客に対しどのような解決方法があるのかともに考え、各分野の専門家・業者と連携して顧客満足につなげる動きをすることが大切である。

行政書士として、終活支援に具体的に关われる業務は次のとおり。

<行政書士の終活支援に関する業務>

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">① 任意後見契約書及び財産管理委任契約書原案作成② 尊厳死宣言書原案作成③ 死後事務委任契約書原案作成④ 墓地改葬許可申請⑤ 任意代理人・任意後见人・成年後见人・保佐人・補助人としての業務（純粋な行政書士業務ではない） |
|---|

<終活支援では「キーパーソン」を意識する>

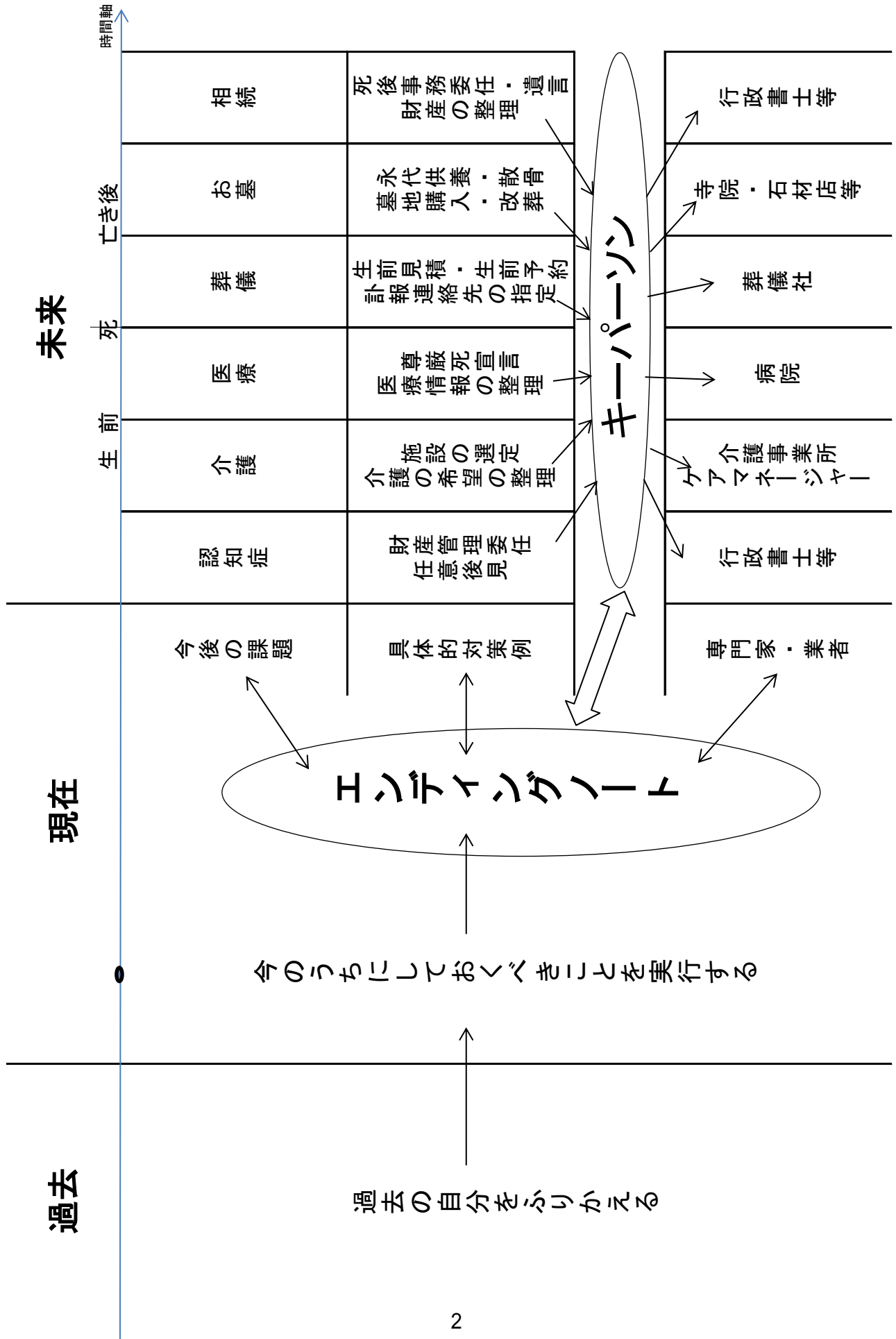
終活の多くは、その実現の場面で自分自身で意思表示できないことがほとんどであるため、自分の考えを最も信頼できる人「キーパーソン」に伝え、その人に理解してもらうことが非常に大切である。「エンディングノート」は、自分の意思が間違いないという証拠を示すものであり、キーパーソンを守る切り札の役割を果たす重要なツールとなる。

<キーパーソンとは>

「キーパーソン」は、終活の各課題について、本人が施した対策や考えを、然るべき専門家・業者に伝える役割を担う、本人の最も信頼できる者のことである。

キーパーソンは、わかりやすい例でいえば、病院に入院する際に求められる「身元引受人」の立場の方となる。身元引受人は、病院や施設で何かあったときに、身柄を引き取ったり、医療に同意する責任ある立場を担うことになる。キーパーソンの候補者としては、別紙の表のとおりであるが、終活の相談に対応するにあたり、行政書士としては、本人にとってのキーパーソンが誰かという点を意識したうえで、課題解決のための具体的な提案を行うことが必要である。

終活のイメージ



キーパーソンの候補者

キーパーソンの立場	終活必要度	メリット	デメリット
同居の親族	<div style="display: flex; align-items: center; justify-content: center;"> <div style="writing-mode: vertical-rl; font-size: 2em; font-weight: bold; margin-right: 10px;">↓</div> <div style="text-align: center;"> <p style="font-size: 1.5em; font-weight: bold;">低</p> <p style="font-size: 1.5em; font-weight: bold;">高</p> </div> </div>	普段からコミュニケーションがとれるので、意思が伝えやすい	距離が近すぎて、終活を意識することなく、時間が過ぎてしまう
近くに住む親族		同居人ほどではないが、近くにいるので意思が伝えやすく、何かあったときでも安心	近くに住んでいても、何かの時に頼ることへ抵抗を感じる場合がある
遠方の親族		終活の課題を意識しやすい状況にあるため、早めに終活に取り組みやすい	いざというときにすぐに駆けつけられず、意思が実現できない可能性がある
友人・知人		気心の知れた親友がいれば、家族より頼れる場合もあり、かえって終活がスムーズに進められる場合も	たとえ親しい仲であっても、他人に終活の課題を託すことには抵抗を感じやすい。 身内でないと意思伝達自体を受け入れてもらえない可能性がある
専門業者		キーパーソンの役割をプロとして担ってもらえるので、気兼ねなく相談や依頼ができる	心から信頼できる業者を探す必要があり、一定の費用もかかる